町連協だより

第16号
平成16年12月15日
◆発行◆
千歳市町内会
連絡協議会
千歳市総合福祉センター
TEL(0123)27-2525
◆印刷◆
道央プリント
千歳市青葉6丁目1−8
TEL(0123)23-5535

「町内会地域活動実態調査」

◆中間報告◆

今年度の町連協の運営方針に町内会の実態を把握し、どんなことが役員の方の問題点になっているかを知るためにアンケート調査を実施いたしました。

一四二町内会のうち提出いただいたアンケート回収率は八四・五%でした。

さらに、建設的なご意見を賜り厚くお礼申し上げます。

尚、集計結果については、後日ご提案致します。

紙面には、多くを戴せることができませんでしたことご了解下さい。

◆町内会として今後早急に解決改善を図る必要のあることがらを教えて下さい。

(複数回答)

(1)街灯の設置、維持　二二%
(2)公園の整備　二一%
(3)ゴミ対策　五二%
(4)町内会館の維持管理　二四%
(5)防犯対策　三七%
(6)交通安全対策　二九%
(7)路上駐車の問題　五七%
(8)老人福祉問題　三四%
(9)青少年育成問題　二二%
(10)その他

◆住民主体の「まちづくり」において行政との連携が必要です。特にどんなことを望みますか。(複数回答)

(1)町内会活性化のための、情報をもっと欲しい　三〇%
(2)町内会と行政の連携を深めるようにして欲しい五〇%
(3)町内会活動活性化のため助成金を増額してほしい　五三%
(4)その他

◆町内会運営上の課題(問題点)についてお答え下さい。

(1)町内会活動に意義や目的意識を見いだせない。　二%
(2)役員のなり手がいない　二三%
(3)新旧住民の意志の違いによる交流の難しさ　一%
(4)世代間の交流の難しさ(価値観の差)　一三%
(5)町内活動(行事等)の参加者の減少　一七%
(6)十分な予算が不足　九%
(7)未加入世帯の増加とその対策　八%
(8)行政からの依頼事項が多く独自の活動に支障がある。　七%
(9)その他　一%

◆会長職としての悩み、課題

・後継者が見つからない
・町内会未加入者の問題
・役員の認識、積極性が足りない
・役員選考委員会の難しさ
・行事への参加者が少ない
・強力なブレーンがほしい
・会議行事が多すぎる
・自分の自由時間が足りない
・現職であるので町内会活動が時間的に難しい
・会長に頼り過ぎる傾があり
・自分の能力不足
・世代による意識の相違
・町内会館がない
・除雪は住民の立場にたって行ってほしい
・子供達との連携

※後継者のこと、行事への参加者の少ないこと、役員の認識、積極性が足りないことに起因するという。

◆会長職をなさっての喜びをお答え下さい。

・住民との交流で多くの人を覚えた
・会員から感謝されたとき
・住民が積極的に協力してくれたとき
・町内会への参加
・役員の積極的な参加
・行事は大変だが楽しみもある
・あいさつする子供が増えた
・市・町連協　その他の活動内容が理解できた。
・活動により相手が理解してくれた。

◆千歳市町内会連絡協議会の運営に関する意見をお聞かせ下さい。

・コミ協との統合(町連協独立)役員の活性化、任期がわからない、マンネリ化
・町連協だよりの増刊等で情報の提供を
・形式的行事は排除
・各部予算の見直し、組織の構築
・町内会に指導的立場に立ってほしい
・町内会では対応が難しい行政への要望
・防犯資材の購入や町内会加入への法的整備等の実施要望

※コミ協との統合が必要との意見が多い。

◆環境に関する問題

1・ゴミステーションに関してお答え下さい

(1)ゴミは規定どおり仕分けされていますか
①大体守られている　六六%
②二・三守られていない家庭があり困っている　二一%
③守らない家庭が多く困っている　三%

(2)ゴミの種別による決まった曜日、時刻に搬出されていますか
①大体守られている　四二%
②二・三守られていない家庭があり困っている　二三%
③守らない家庭が多く困っている　三%

※きちっとしたゴミの処理は住民意識の向上だが…

各部会活動の様子

●女性部会・環境部会●

「婦人から女性」

女性部会長　山内幸子

三十七年間お世話になった婦人部会の名称を改め、今年度から女性部会に変更、時と共にその在り方や価値感は多少変りつつも、目的は一つ、住み良い明るい地域づくりに力を貸していただく事です。

複雑化した激動の社会の中にあって私達女性部の果す役割は非常に大きいと思います。

そのため部会では研修会、講演会、部長会議等を開き、時に応じた課題(例えば健康について、消費問題について、防災について)を取りあげ知識を得たり、秋には行政に関心を寄せ、行政に対しての意見や要望を気楽に話し合い勉強しています。

部長会議では各地域での情報を交換し、共感する心や仲間をつくり、自分の地域に合うものを持ち帰り、心ふれ合う地域組織活動の輪を広げていただく事を願っています。

ただ、ともすると、私達は数々の行事の中で、目的と手段を間違えがちです。

知らず知らずのうちに手段が目的になっていないでしょうか。

親睦会や旅行はよりよい地域づくりの目的の為の、一つの手段にすぎないのです。

各々の地域の実情に合わせ、近場で経費をかけない手段で目的に向うことも効果上々と思われます。

ボランティア活動は現在施設(暢寿園、千寿園)の大掃除に撤しております。

多数の参加者がおられますので人数と内容の調整中ですが、男性の方や小学生の参加も有難く、人と人とのつながりの中で、お互いに成長する存在がうれしいのです。

さて「女が変れば男も変る男も変れば女も変る」をキャッチフレーズの「男女共同参画」社会は、今や男性の理解のもとで着々と進んできている様です。

女性の知恵と発想、感覚を生かし、地域の人と人を結びつけ、助け合う心のリーダー役として女性部会は頑張っています。

「環境の時代」

環境部会長　長谷　勤

町連協の平成十六年度定期総会において、専門部会の一部改編と名称変更が決定され、私たちの「生活環境部会」が「環境部」となりました。

しかし、一口に「環境」といっても非常に広範なのです。

①生活環境
大気・水質の保全、騒音

②自然環境
森林や水辺の保全と回復、野生動植物の保護

③社会環境
公園・緑地の整備、景観の創出、まちの美化

④地球環境
地球環境の保全
・地球温暖化の防止
・オゾン層・熱帯林の保護、循環型社会の形成
・資源の循環・ごみの減量
・省資源・省エネルギー化

ところが今年、九月、環境部会の視察研修《酪農大学へ一日入学しよう》で、講義『地球の限界』を聴きました。

『我々の乗っている宇宙船地球号は、資源やエネルギーの無尽蔵の倉庫を持っているわけでなく、又、汚物や不要物を捨てる無限大のゴミ箱を持っているわけでもない。』と警鐘を鳴らす。

次いで『有史以来の資源の消費を支える技術革新は、文明の発展や経済成長の礎となってきたが、産業革命以降石油や石炭の利用を発見、人類は未曾有の文明を作り上げることに成功した。

しかし、二十世紀の終りに化石燃料を燃焼するとき、大気中に発散する二酸化炭素が主原因の地球温暖化が叫ばれるようになった。

今後も健全な地球環境を保全し、持続発展が可能な社会を構築するには、大量生産・大量消費・大量廃棄システムを見直し、限りある資源の消費を低減することが必要不可欠』と説かれた。

私はこの『地球の限界』を受講するまで、前掲の①～③が身近な環境問題で、④は地球規模のとてつもなく遠く大きく難しい問題だと決めていました。

しかし正反対でした。一人ひとりの力は小さい。しかしそれも《大河の一滴》。みんなで力を合わせ『環境』時代を生き抜きましょう。

町内会のご紹介

活発な町内活動

桂木五・六丁目町内会
会長　井越忠男

桂木五丁目町内会は、昭和五十三年桂木蘭越連合町内会から分離し、発足しました。

現在、世帯数も百四十世帯を越すまでになりました。

清流千歳川と、緑に恵まれ、航空機の爆音に悩ませることも比較的少ない、閑静な居住環境の町内会です。

町内会活動も活発です。活動内容としては、春の大掃除に始まり、観桜会、千歳川清掃への参加、盆踊り、子供神輿、敬老会行事、子ども餅つき大会、新年会等を通じて会員の親睦を図っています。

昨年、除雪支援活動の開始にあたりボランティアを募集したところ、多くの方々の賛同を得られ、大変感動しました。

最近はゴミ集積場の環境整備も進み、カラスによるゴミ散乱の被害も無くなり、喜ばれております。

資源回収の整理、分別、資源小屋への搬入要領等も大変向上しております。

これも日々貢献して下さる方がおられるからと、感謝しております。

町内会活動も、会員の高齢化と世帯間の価値観の相違もあり、今一度、過去にとらわれる事もなく、検討すべき時期に来ているかもしれません。

いずれにしても、当町内会は会員相互の親睦、住み良い環境づくり、地域住民の福祉の増進に寄与する事を目的としているので、会員一団となって、町内会の発展のために努力したい。

人と人との絆を大切に

信濃二丁目町内会
会長　毛利敏雄

私共の信濃地区は、自衛官の集団住宅として開発されました。当初、四十六戸からスタートした自治会も、平成十年頃には約千世帯となり意志疎通を欠く事から四町内会に分割されました。

私たちは平成十二年四月「信濃二丁目町内会」として新たなスタートを切ったわけです。

新町内会となってからは、何かが変ったと実感して頂くべく「住み良い町づくり」を目指し役員一同力を合わせ取組んで参りました。

特に人と人との交流を大切にし、その絆を深める事に主眼を置いています。

そのための具体的な町内活動を紹介しましょう。

先ず、福祉部担当の事業として、敬老会、除雪支援等。

次に、青少年部担当の夏のキャンプ・子どもお楽しみ会。又、女性部担当の女性のための各種講習会・町内会主要行事に対する積極的な協力。

そして総務部が担当する「夏まつり」や「餅つき大会」「新年交礼会」には、全ての人に参加してもらえるような心のこもった企画を考えております。

実施に当っては、担当役員のみでなく、全役員と会員の協力を得て行っています。

中でも、生活環境部につきましては、町内会六つの部の中で最もハードな部であり、ゴミ集積所の維持管理、資源回収業務、公園管理、交通防犯関係業務、又、これに類した町内の雑用を四人の役員で一手にひき受けてやっております。

これらにつきましても、他の役員、一般会員の皆さんの協力があればこそ、何とかやって居るのが現状であります。

私共二丁目町内会で今一番頭を痛めて居りますのは、役員のなり手がなく、役員確保が極めて難しくなっている事。

そして現在の主力役員のほとんどが七十歳以上である事から、今後は若手役員の育成、町内共同参画という事で若い会員の方々に積極的に役員として参画してもらうための方策をどう立てれば良いか当面のそして重要な課題であると考えております。

■道央ブロック町内活動研究大会の報告■

テーマ「住民主体の地域づくりを考える」

今年の研究テーマを踏まえ、講演と分科会の形で熱心に討議されました。今回は、講演の概要を報告します。

題名「垣根のないまち、これからの町づくりへの提言」

講師　伏島信治氏

伏島氏は、札幌市の「南あいの里」のまちづくりに関わった時「どの様なまちづくりにしたいか」と言うテーマの具体策を提言したものです。

言わば一つの理念の下に理想のまちづくり、とも言えるものです。

1、どこよりも快適な町とするため

①垣根のない敷地に緑が連なる「庭の町」

・これからの町づくりの理想として、又実体を示す大きなシンボルとして「垣根のない町」を掲げた。

・垣根がないと言う事は、心のバリア(障壁)を設けない、つまり一軒一軒が開かれている事である。

②皆でコモンペース(共にある、する空間)としての公園

・自治体と相談の上、協働して公園を整備し自主的に管理します。

・余分なお金をかけず実のなる木を植えるなどして、子供も大人も公園づくりを楽しむ。秋には、持ち寄りの「芋煮会」等のイベントを開き、町ぐるみの楽しみ会にも活用します。

・子供は、原っぱが好きです。遊具など余り置かず思いっ切り遊ぶ空間を作ります。

③ゼロエミッション(廃棄なしを目指します。

・家庭ゴミと有機物の排出を出来るだけ抑制するようにする。生ゴミを堆肥化する。

・ディスポーザー(廃棄物を下水に流すこと)を出来るだけしないようにするための生活のルールの申し合せをする。

・レジ袋の使わない習慣づけ。家庭の不用品などは、空き店舗等を活用してそこに展示して必要な人は、貰って行くシステムづくり。

(コミュニティヤードの設置)

④雪に強いまち

・自治体と協働して融雪溝や融雪槽の設置を進め、雪捨てに困らないようにする。

自治組織の中に「雪援隊」を設け、冬の問題の解決を図る。若い人だけに頼るのでなく老人の協力を得る。

今、元気の良い老人は沢山いる、その方々の支援を得る。その際、多少の報奨金も必要である。

ボランティアは、全く無償の行為ではない。

「自発的に何かしたい」意義を感じてやる事であり最低限の報酬行為は、有得る。

⑤情報に強いまち

・パソコンのインターネットを活用し瞬時に多くの情報を共有したい。パソコンの扱いは難しいが、この器具に強い老人も多い。出来れば町内毎に、この方を講師として格安の講習会を組織していく。

町内会ホームページを立ち上げ、町内の情報伝達を図る。

⑥災害に強いまち

・阪神淡路大震災では、大きな災害を被った。

その中にあって、淡路島北淡町では、多くの人が生き埋めになった。しかし、多くの方が無事救出された。

その訳は、第一に日頃より町内のコミュニケーション(付き合い)が良く取れており、つぶれた家のどこを寝室にしているか、熟知しており、時間を置かず救出作業に取り掛かれたこと。

第二に住民の協力体制ができていて、各職種の方がそれぞれに、その役割を発揮出来た事。例えば、大工さんは、ジャッキを持ち出し、大きな木材を持ち上げる事が出来た。

人力では、不可能なことを素早く協力して出来た事等が上げられています。

つまり、普段から、そうした時にも、対応できる組織作り(良好な人間関係)が出来ていた事になります。

2、安心して暮らせるまち

・地域で子育て、子育てに不安を感じている若い親をサポートする体制。

・年をとる事が怖くないまち、徘徊も犯罪防止も皆でケアするまち。

まとめにかえて

「安心して住めるまちづくり」は、住民の心の垣根を取り払い触れ合いのある人の交流がベースとなります。

伏島氏は、江戸時代からの日本人の民度の高さ、地域の環境保全のシステム、その美しさこそ原点であると指摘しております。戦後の貧しい時代でも、支えは、家族であり、地域社会でありました。

何もかも人任せの考えは終わりにして、地域の人々と心の交流を図り、行政との協働体制の中で地域の抱える様々な課題を解決していく事が求められていると、思えた。

編集後記

道央ブロック研究会に参加する途中「アルテピアッツァ美唄」に立ち寄った。

ここは、閉校した学校を利用して、アートスペース、幼稚園として再生された施設である。

野外には、安田侃氏の彫刻が配置され芸術空間として生かされていた。

又、校舎内外は、市民に無料で各種会合の場として提供され、人々は、音楽を奏で詩の朗読を楽しみ、心を癒しているそうである。

校舎の改造、美術品の展示には、それ相応の財政負担も強いられたであったろうに、それを決断した行政、活用する人々、誠に市民と自治体の協働の賜ものであると強く感じた。

〈編集担当　総務部会〉